

健康教育

(健康相談、児童生徒の活動への支援も含む)

趣旨

生涯を通じて健康な生活を営むことができる基礎的能力を培うため、学校教育活動の中で心と体の調和のとれた健康を保持増進するための効果的な進め方について協議する。

協議題

- 1 児童生徒の心身の健康づくりの効果的な進め方について
- 2 児童生徒委員会や総合的な学習の時間等における児童生徒の活動の支援について
- 3 心身の健康づくりを推進するための校内体制づくりや家庭や関係機関との連携について

第 3 分科会

発 表 主 題	発 表 者	
	所属名及び職名	氏 名
豊かな心と主体性をもった、心身ともに健康な児童の育成 ～保健指導、体力向上、 委員会活動等の取組を通して～	鹿児島県指宿市立今和泉小学校 教 諭	吉 松 和 宏
子どもの食に対する関心を高めるために ～授業・保護者への啓発を通して～	大分県玖珠町立森中央小学校 栄養教諭	森 悦 子
校内専門家と連携した健康相談のあり方 ～チームで行う生徒支援の実際～	福岡県立博多青松高等学校定時制 養護教諭	中 尾 八 衣

役 員	所属名及び職名	氏 名
指 導 助 言 者	鹿児島県教育庁保健体育課 指導主事	池 田 隆
司 会 者	宮崎県西都市立銀上小学校 教 頭	牧 野 宏 紀

質疑応答及び研究協議

1 質疑応答

[質問1] 吉松先生の発表について

ア 弁当の日は、10月に実施とあるがどういう場面で食べたのか、家庭への投げかけについて、実施後の保護者や子どもの変容について教えていただきたい。

(鹿児島県 吉野東小 大村)

イ 各学級、高学年の出前指導における時数の設定はどのようにしているのか。1家庭1実践について、PTA活動として行われているのか。週単位での実施か、月単位での実施か。

(熊本県 久米小 鮎田)



【回答】

ア 手作り弁当の日は、陸上競技会の予備日に給食がストップするため活用した。昨年度から校長の提案で実施している。取り組み方は、10通りの方法、ご飯を炊く、盛り付け、ご飯を詰める。詰めるだけでも良いなどの幅広い取組である。

家庭への呼びかけについては、事前に学校から取り組み方について文書で家庭に呼びかけをしている。

結果は、子どもたちも作ってみて早起きがきつかった、親の大変さが分かった、家の人も見守りが大変だった、作りたいものが多すぎたと感想が出ていた。

本年度も取り組んでほしいとの声が挙がっている。宮崎県は、取組が盛んと聞いたので、鹿児島県でも今後も取り組んでいきたい。

イ 給食の時間を利用している。この日は1年生、別の日は2年生など無理のないように設定し、委員会の子どもたちが報告している。

長くなく、簡単に報告している。

1家庭1実践については、昨年度は1家庭1家訓としてPTAの広報指導部が中心となって取り組んでいる。この取組は、年度当初に1家庭1実践という紙を各家庭に2枚配布(家庭用と学校用)し、書いて提出する。その内容を1年間取り組んでいる。各家庭の取組に差はある。

(発表者 吉松)

[質問2] 森先生の発表について

家庭との連携における夏休み野菜料理コンテストは、PTAと連携しており、素晴らしい実践だと感じた。成果として多くの家庭が積極的に参加したとあり、たくさんの作品が提出されたと思うが、優秀な作品を選ぶ審査の基準と年度末に発行されたレシピ集の活用について教えてほしい。

(宮崎県 延岡小 山内)



【回答】

PTA研修部の取組のため、教員はお手伝い程度である。関わることは、主として用紙配付や回収などである。研修部員が、250名の学校のため一斉に見るのは困難である。クラスごとに選んでいたりと、クラスごとが心許ない場合は、学年で集まって選んだりしている。明確な基準はない。研修部員がよいと思ったものに例えば『がんばったで賞』『野菜をたくさん食べられるで賞』『おじいちゃんおばあちゃんも喜ぶで賞』などのタイトルをつけたものを5つ選んでいる。学年ごとにクラス前掲示をして大きな行事の度に体育館に一斉掲示して見てもらう。

レシピ集の活用方法は、明確な活用方法はないが、毎年同じような取組をしているので、参考にしてレベルアップしたレシピを作ろうと意気込みにつながっている。

(発表者 森)

[質問3] 中尾先生の発表について

ア 訪問相談委員については、どのように選んでいるか。実際の指導内容はどのようなものかをお聞かせ願いたい。

(宮崎県 福島高 金丸)

イ 特別支援教育ボランティアを依頼した経緯。発達障がいがある生徒の授業のサポートはどのようなことをしているのか。

(宮崎県 宮崎東高 日高)

ウ 健康教育推進事業(年1回)は、具体的にどのような内容なのか。

(熊本県 済々高 柴田)

エ SSWについて。職員研修の年間割合とどのような内容で行っているか。

(宮崎県 都農中 木下)

オ 前任校との連携で工夫していることは。

(宮崎県 都城泉ヶ丘高 川野)



【回答】

ア 訪問相談委員と特別支援教育ボランティアについては、県の広報教育課より案内がある。学校独自で探すことになるが、本校では、スクールカウンセラーの先生が九州産業大学の先生のため、学生を紹介してくれる。昨年は、スクールカウンセラーが大学の先生ではなかったが、福岡県には心理学を学ぶ大学が福岡大学、福岡女学院大学、筑紫女学園大学、九州産業大学など何校があるためそれぞれの大学の教授の先生に手紙などで連絡をして学生へお願いをする。

不登校の生徒が多数いるため、保護者と面談してスクールカウンセラーが仲介となって訪問相談員とつなく。初回は、職員(就学委員長、担任なり)が付き添い訪問する。次回からスムーズにいけば、担任とかではなくスクールカウンセラーが訪問する。自宅がいやであれば近くのファミレス等や喫茶店で対応してその相談内容は必ず学校の方に文書として記録していただいて、就学委員長、スクールカウンセラーの先生の指導助言をいただく。

イ 福岡教育大学から昨年は特別支援教育ボランティアで1人来ていただいた。大学では、ボランティアとして行くことで単位として認めてもらえるらしい。特別支援教育ボランティアの授業サポート内容は、生徒の発達障がいによって違う。例えば、情報科学でパソコン主体とする授業やキヤドという授業で、単純な打込み作業はできるが空間認知が苦手な生徒と一緒に支援していただく。本人の苦手部分で授業サポートを行う。全体授業で、先生1人に対して生徒20人の場合、横に座ってサポートしていただく。また、国語や数学の一般教科の時は、90分授業でじっと座っているのが苦手で中断してしまう生徒について、お手洗いにいくなど気持ちをリセットして席に座るよう促す。先生1人と生徒だけで円滑な授業を進行させるために補助として入っていただく。指示されたページを開くよう支援するなどのサポートをしていただいている。

ウ 健康教育推進事業は、福岡県独自である。本校は産婦人科の悩みを訴えてくる生徒が多いため、個別で保健室対応することが多い。その生徒を対象としてグループ相談をし、同じ時間に気になる生徒をピックアップして産婦人科の先生に話をさせていただく。精神科の先生は、スクールカウンセラーが入っているため病的な部分が濃いと思われる生徒に「こういう先生が来るけどちょっと話をしてみない？」と養護教諭が判断して分けているところもある。

エ スクールソーシャルワーカーは今年で3年目である。一般の先生方がどうやって活用しているのか浸透していない。初年度は、スクールソーシャルワーカーがどういった仕事をするのか、どういう動きをするのか、実際にど

ういうことで動くか紹介をするなどの研修会をした。年間1回の研修である。2年目も同じく事例のような形でこのようなことでこのような支援をしましたという紹介や、本を出しているのをそれを基に話をさせていただいている。3年目は今後実施する予定である。

オ 送る側の立場のときに気になる生徒は進学先に出席状況を教えてもらっていた。前任校の情報は大変貴重であるため、気になる生徒があればバトンを渡す学校に情報をいただけると配慮しやすい。気になる生徒がいれば前籍校の養護教諭に情報をいただき、生徒を把握しながら接するようにしている。

(発表者 中尾)



指導助言

鹿児島県教育庁保健体育課

指導主事 池田 隆

鹿児島県の吉松教諭の発表については、児童の実態について県で取り組んでいる「学校楽しいーと」、あるいは健康診断結果、体力・運動能力調査結果から、子どもの心の安定や体力の向上がうかがえる。全体的にどの学年も数値として高い結果が出ているようである。これは、全校体制によるベクトルを同じにした健康教育が展開されているためだろうと感じた。保護者と一体となった学校独自の名物行事である遠泳大会への取組も、その表れであり、学校の勢いを感じる。

保健指導については、喫煙・飲酒・薬物乱用防止教室において地域警察署の方を招いたり、性に関する指導においては、県助産師会の方を招いたりしているが、いずれにしても養護教諭や栄養教諭等の高い専門性を生かすとともに、外部の方々の力も得ながら、質の高い集団指導あるいは個別指導がなされていると感じた。また、単に取り組むのではなく、学校の健康課題を的確に捉え、その課題解決のために学校教育のあらゆる場で実践されている点は、大変参考になる取組である。

健康委員会については、各学級への出前指導という大変ユニークな実践をしていた。上級生は下級生に教えるために学ぶと思うが、そのことで正しい知識を得ることができ、自分自身を磨く機会にもなっている。また、下級生にとっては、子ども同士の言葉・会話による説明があるので、大変分かりやすく興味深く聞き入っているのではないかと感じた。さらに、この活動は、保護者への発表へと展開しているため、自信をつけられるとともに、自己肯定感もより一層高まっていくものと考えられる。

「一家庭一活動」の実践については、家庭の協力を得ながら、子どもの様子をつぶさに知ることができるとともに、教師と保護者のコミュニケーションを図る場としても活用することができている。今後も無理のない、できる範囲で長続きのする活動をどんどん推進して行ってほしい。できれば、子どもたちの家庭における変容についても追跡できると良い。

課題として、「健康意識の低い家庭、運動嫌い

の子どもへの働きかけ」を挙げていた。生涯にわたって心豊かにたくましく生きる力を育むという観点から、「なぜ意識が低いのか」、「なぜ運動嫌いなのか」、そのような背景を十分リサーチしてそこに寄り添った地道な指導・支援を加えることこそが重要であると考えている。その積み重ねが、少しずつではあるが、子どもの成長へとつながっていくのではないだろうか。



大分県の森栄養教諭の発表について、栄養教諭という立場から、栄養教諭を活用した食育推進事業の一つとして、学級ごとに目標や実践を考える「ノー残さいウィークデー」に取り組んでいた。食への興味関心、感謝の心を育むという明確なねらいのもと、各学級に主体性をもたせ、実践につなげている点が、大変素晴らしい。食に関する指導のコーディネーター役としての積極的働きかけを垣間見た。

家庭との連携の取組の一つとしては、「夏休み野菜料理コンテスト」があった。親子で作った野菜料理のレシピを作成し、優秀作品を掲示するばかりではなく、様々な学校行事の折に再度掲示を試みたり、年度末にレシピ集を発行したりするなど、発展的活動としての広がりが感じ取れた。可能かどうかはわからないが、そのレシピを学校給食献立へ導入するなどの実践があると、さらに関心が高まりそうである。また、校内共有フォルダの活用により、各学級担任を介して、学級通信へ「食育コーナー」を掲載しているとのことであった。栄養教諭の高い専門性を生かし、食に関する情報を積極的に提供する手立てといった点で、大

変参考になる取組である。類似した取組ではあるが、共有フォルダにICTを活用した教材を入れ、それを子どもたちが直接活用するといった事例もある。参考にしていきたい。

保健集会では、より生活に密着した、時季を得た身近な話題を取り上げるとともに、「食と体力」といった視点を子どもたちにもたせるためにパワーアップタイムと関連付けた指導を行っていた。このように食に関する指導が単独で行われるのではなく、他の教科・領域等との関連を図った指導となるように意図的・計画的・継続的なご指導をお願いしたいところである。

課題として、年間指導計画の系統性を挙げていた。重点指導計画は作成したけれども、子どもの発達段階に応じた指導になっているかどうか、前の学年と当該学年そして次の学年の指導に系統的つながりはあるかどうか、さらに学校教育目標の理念が反映されているかどうかなど、様々な視点から年間計画を見直すことは、大変重要なことであるため、チャレンジしていただきたい。

福岡県の中尾養護教諭の発表について、博多青松高等学校からは、校内における指導体制組織の充実と外部講師による専門性の高い指導の在り方について学ばせてもらった。その一つとして、修学委員会、中途退学防止委員会があった。このような委員会の設置から、学校の「何とかして子どもたちを支えよう。」という気概が伝わってくる。また、この委員会が単独で機能しているのではなく、コンサルテーションやリレーション、相談窓口、外部関係機関とつながっていることがさらにすばらしいと感じた。個に応じた大変きめ細やかな対応がなされている。それから、SC（スクールカウンセラー）、SSW（スクールソーシャルワーカー）、訪問相談員、特別支援ボランティア、臨床心理士、産婦人科医、および精神科専門医といった専門家スタッフを取り揃え、様々な角度から生徒を支援する体制が整っていると感じた。生徒はもちろんのこと、保護者も安心して相談することができているのだろう。専門的立場からの適切な指導・支援は、不可欠なものだと思うので、できる範囲で、各学校における体制づくりを進めていただきたい。

日常における支援として、生徒観察あるいは保健室における健康相談があった。今日、学校においては、子どもの心身の健康問題の早期発見・早

期対応を図る上で大きな役割を果たしている「日常の健康観察」や「健康相談」などの適切な実施が求められている。現代を生きる子どもたちにとって今後、ますます重要になってくる視点ではないだろうか。成果の一つとして、欠席日数のデータが示されていた。30日以上長期欠席生徒が、こんなにも解決されるのは、やはり日頃の取組の賜物である。高校へ入る以前の義務教育段階においても、このような状態にまでもっていかると良い。生徒が楽しく学校生活を送っている様子が目に浮かぶようである。

最後に、「生徒支援は、チームで行うことが鉄則である。決して、一人で抱え込むことがないように。」という言葉が印象的であった。この言葉は、まさしく、全校体制による指導の重要性を物語っているのではないだろうか。

最後に、本日の分科会から学んだことという視点で、健康教育を効果的に進めるにあたって3点ほどお願いしたい。

1点目は、「学校組織としての一体的取組を推進していただきたい。」ということである。健康教育は守備範囲が広く、かつ、専門的な内容を学校教育活動の様々な場面で指導していくことが不可欠である。そのためには、学校内外の専門性を有する職員や専門家を十分に活用していくことが期待される。さらに、外部専門家としてSCやSSW、あるいは市町村部局の保健福祉部の職員など、それぞれの分野における専門家の協力を得ることが重要である。健康教育を進めるにあたっては、まずこのような校内組織の体制作りから始めてみてはいかがだろうか。

2点目は、「校長のリーダーシップと担当者同士の連携による全校体制での取組を推進していただきたい。」ということである。学校における組織的な指導体制を整備するためには、まず、校長が健康に関する深い認識をもつとともに、健康教育を学校運営の基盤に据えることが重要だと考えている。校長のリーダーシップの下、全ての職員及び外部講師等がそれぞれの役割を果たし、日頃から全職員で児童生徒の健康課題等を把握するとともに、情報交換あるいは研修に努めるなど、組織的な機能を発揮できるよう、互いに連携を図ることが大切である。このような体制を整えることで、児童生徒に対して一貫した教育が保障されると同時に、保護者や地域の信頼を得ることもでき、

学校、家庭、地域との連携の充実にもつながっていくのではないだろうか。

3点目は、「学校保健委員会あるいは地域学校保健委員会等の活性化を図っていただきたい。」ということである。学校における健康課題を研究協議、推進する組織が学校保健委員会だが、健康教育の推進の観点から運営の強化を図ることが重要だと考えている。学校内外における、健康教育に関わるメンバーが知恵を出し合い、工夫を重ね、子どもたちのために健康課題を解決していく主体的姿こそ、今後の健康教育の充実を占うバロメーターになるのだと思っている。また、そのことが家庭や地域における教育力を充実させていくのではないだろうか。さらに、その学校保健委員会の取組を一步発展させ、地域にある幼稚園、小学校、中学校および高等学校の学校保健委員会が互いに連携し合い、地域の子どもの健康問題の協議等を行う地域学校保健委員会の設置についても、各地域の実情に応じて検討してみたい。以上3点お願いしたい。

「子どもは未来からの旅人である」これは、私が初任の頃、ある先輩からいただいた言葉である。子どもたちは10年、15年の時を経て、やがて未来

へと帰っていく。その時に、その時代を生き抜く力を付けてあげなければならない。現代における健康教育の課題は山積しているが、将来はどのような世界になっていて、そこを生き抜くためには、どのような力が求められるのかをしっかりと見据え、そのためには現在、どのような教育を子どもたちに施すべきなのか、それを考えることは非常に重要であると思っている。そういった観点からも、本日の研究発表は、課題解決への手掛かりを与えてくれるとともに、今後の健康教育の実践に対する意欲を喚起してくれたものと心から感謝申し上げます。

